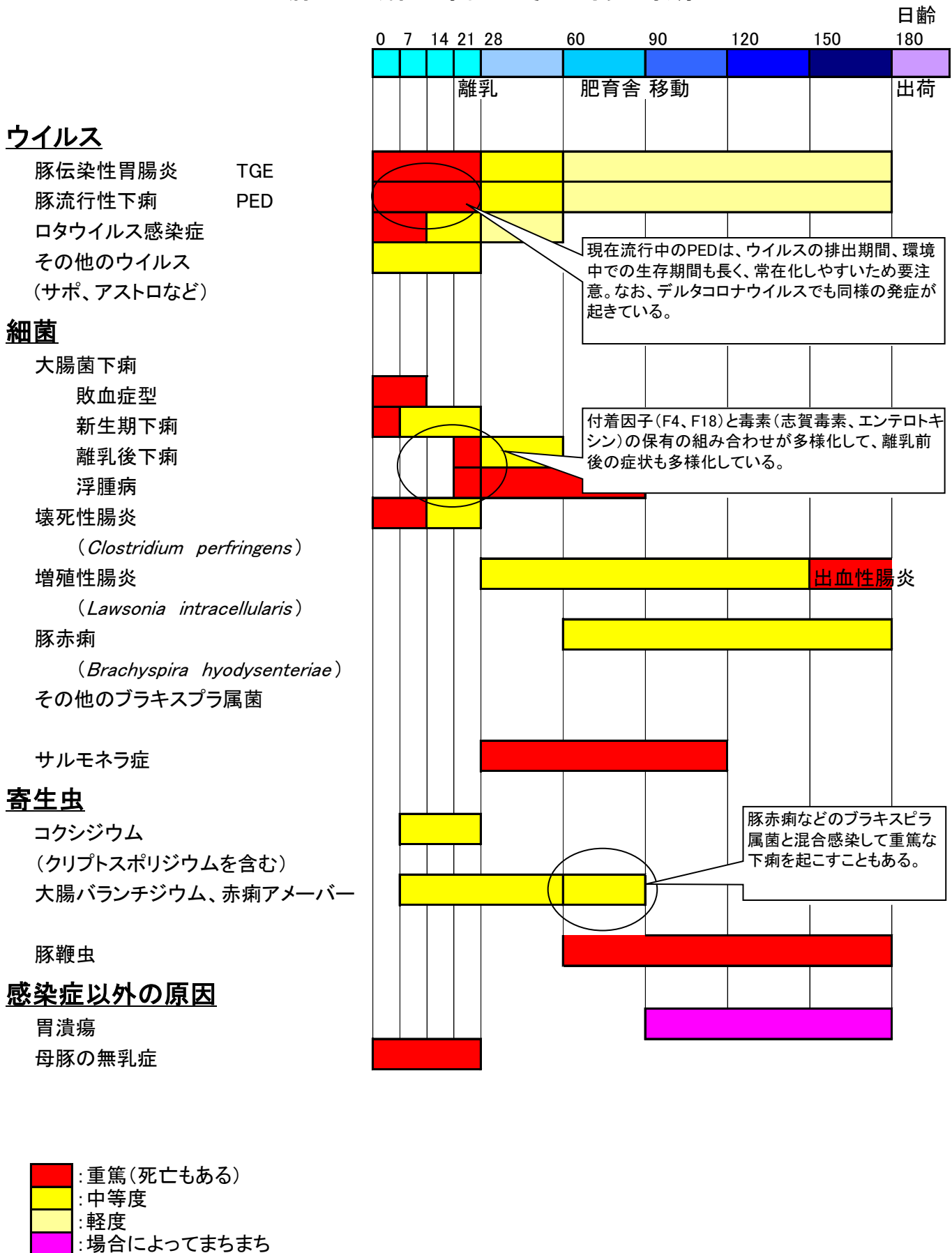


# 子豚の下痢の原因とその好発時期



## 表の説明

- ・この表は子豚に下痢を起こす代表的な病原体を選び出し、好発時期を図示したものであり、本誌2002年11月号に掲載、2009年3月、2012年4月に改定し、今回再度検討したものです。表にしました好発時期はあくまでも一般的な好発時期であり、場合によってはこれ以外のステージでも発症することはあり得ます。
- ・症状の重さは、重度、中等度、軽度の3段階で示していますが、これも病原体の病原性や豚のストレスの度合いなどにより、異なることもあります。

## ウイルス

- ・現在流行中のPEDは、哺乳豚の致死率が高く、ウイルスの排出期間、環境中の生存期間も長く常在しやすいため要注意。
- ・TGE、PEDは重度感染の場合、母豚も発症する場合がある。
- ・デルタコロナウイルスによっても、PEDと同様の下痢が報告されているが、症状は若干軽症である。
- ・ロタウイルスの哺乳中、離乳後の下痢便からの検出率は非常に高率である。(勝田ら、2006)
- ・ロタウイルス感染症は、母豚で免疫の無い群で発症した場合、哺乳豚の死亡率は非常に高くなる。
- ・下痢起因ウイルスはその他いくつか報告があり、サボウイルス、アストロウイルスなどの関与が疑われている。

## 細菌

- ・大腸菌症は、菌のタイプや感染時期により、多様な発症形態があるが、ここでは大きく4種に分類した。
- ・F18付着因子と志賀毒素の両方を保有する大腸菌が浮腫病を引き起こすが、さらにF4付着因子、エンテロトキシンなどの病原因子が複雑に組み合わせることによって多様な症状が引き起こされる場合がある。
- ・壊死性腸炎は、時として肥育豚や育成母豚で発症する事もあり、その場合非常に重篤で致死性である。
- ・増殖性腸炎は一般的に感染日齢が大きいほど症状は重篤であり、肥育期では出血を伴い急死する場合もある。(出血性増殖性腸炎)
- ・増殖性腸炎ワクチンが市販され数年が経過して、著効を上げている農場もある。
- ・豚のサルモネラの血清型は、*Salmonella* Typhimurium (ST) と *Salmonella* Choleraesuis (SC) の2つが多いが、主に下痢を起こすのはSTであり、SCは敗血症の原因となる。
- ・豚赤痢菌以外のブラキシピラ属菌の感染による下痢も、ここ数年報告が増えている。

## 寄生虫

- ・2008年に発売された抗コクシジウム剤の効果は引き続き高く、使用農場は多い。
- ・オガ床豚舎の普及により、寄生虫性の下痢には十分な注意が必要となる。
- ・大腸バランテジウム、赤痢アメーバが子豚期にブラキシピラ属菌と混合感染すると非常に重篤な下痢を示すことがある。

## 感染症以外の原因

- ・粒度の細かい配合飼料の給与による胃潰瘍は近年ほとんど見られなくなりつつある。
- ・母豚の乳房炎などによる、乳質の変化や乳量の減少により、哺乳豚が下痢を起こす事がある。
- ・分娩後のオキシトシン注射の使用により、逆に泌乳が止まってしまうケースがある。オキシトシン使用時には、一回の注射量を減らし、分娩時間の長いものだけに限定するなど注意が必要。